
2. サイモンの組織均衡論を説明する

組織の参加者とはその組織に関する利害関係者である。利害関係者には、資本家、顧客、従業員、供給業者等が含まれる。個人は、組織の活動が個人の目的に直接あるいは間接的に貢献するときに組織の参加者となる。組織への貢献とは、資本家にとっては資本の提供、顧客では代価、従業員では労働力、供給業者では原材料等にあたり、組織からの誘因は、資本家では配当、顧客では財・サービス、従業員では賃金・報酬、供給業者では代価となる。

個人または利害関係者は、組織に提供する貢献と組織から受け取る誘因を比較し、誘因が貢献と等しいかそれより大なる時、組織への参加を継続する。

1 集団による貢献が、その組織にとって他の集団への誘因の源泉となり、貢献の合計が誘因を供給するのに十分な量と種類があればその組織は存続し成長する。しかし、逆であれば組織の均衡が保てず縮小し存続することができなくなる。すべての利害関係者による貢献と誘因の均衡を維持することが組織存続の条件であり、管理者の役割である。サイモンの組織均衡論は誘因と貢献の理論で組織の存続条件を体系化したものである。 (A)